

## 言語，空間，多産性

### ——レヴィナスとデリダにおける外在性への問い——

小林 嶺

ジャック・デリダ「暴力と形而上学」<sup>1</sup> (1967) は、エマニュエル・レヴィナスに関するまとまった研究としてはもっとも早い時期のものであり、かつその影響は、レヴィナス研究にとって今日まで決定的なものであり続けた。しかしながら、そのデリダ論文のインパクトの強さからか、両者のあいだに横たわる思考の交錯とその諸問題とが、いささか簡略化されたかたちで受け取られていることもまた事実である。たとえば、レヴィナスの思想とはまったき他者への倫理であり、デリダはその他者の純粋性を批判し、暴力を介さない他者との関係はあり得ないことを示した、といった要約がそれである。こうした要約は決して間違いではない。確かにレヴィナスの哲学は「顔の倫理」とでもいうべき他者論としての側面が強い。しかし、このような大枠の視座からでは捉えられないような緊張関係が、「暴力と形而上学」やその他のデリダによるレヴィナス論のなかには孕まれている。そして、それを解きほぐすことは、よく指摘されるデリダからレヴィナスへの影響のみならず、レヴィナスからデリダへの影響を考えるうえでも欠かせない作業であるように思われる。とはいえ、こうした企図に対して本稿ができることはほんの一部分にすぎない。ここではさしあたり、「暴力と形而上学」および『全体性と無限』<sup>2</sup> (1961) の読解を中心に、レヴィナスとデリダの間にある緊張関係がもっとも先鋭化する地点、それがエロスのものをめぐる一群のモチーフであるということ、これを示すことを第一の目標としたい。

#### 1. デリダの脱構築の枠組み

デリダは『全体性と無限』を読むにあたって、レヴィナスの立場を、発語を介

した絶対的-他者との出会いという構図から捉えている<sup>3</sup>。それは第一に音声中心主義として、第二に現前の形而上学の裏返しとしてのまったき非現前についての形而上学として批判されることになるが、「暴力と形而上学」にあつてはその二つの問題のどちらもが、「言語についての問い」として設定されている。デリダ自身の言葉で言えば、後者は「言語におけるもろもろの問い (des questions de langage)」として、前者は「言語というものについての問い (la question du langage)」から分析されることになる<sup>4</sup>。先取りして言えば、「言語におけるもろもろの問い」は、言語のうちで他者を扱うことの困難について、「言語というものについての問い」は言語の本質規定についての問いである。デリダはそれらの問いを通じて、レヴィナスの論じる他者が存在論や言語の暴力から無傷ではあり得ないこと、すなわち、ある種の純粋なものの汚染を暴こうとする。そして最終的にこの汚染可能性は、レヴィナスにおいて非歴史的な言語の本質(「超-歴史性 (trans-historicité)」)によって斥けられており、それゆえその神学性抜きにはレヴィナスの議論は成り立たないとデリダは考えるのである<sup>5</sup>。これらを検討するうえで、まずは補助線として、デリダの脱構築の試みをもっとも緻密に展開されている著書のひとつ、『声と現象』(1967)を参照することにした。

## 2. 他者論としての『声と現象』

「暴力と形而上学」と同年に上梓された本書において、よく知られるように、デリダはフッサール現象学における現前の形而上学を批判した。フッサールにおける現象学的還元プログラムの「意味」が自己に対して純粋に現前している状態としての理念的な意識のモデルを導くための道程であるが、そこでフッサールは表現の領域に事実上は(en effet)絡みついているとされる指標的な要素を徹底的に還元しようと努める<sup>6</sup>。そして、還元によって指標的な要素を徹底的に削ぎ落とした状態こそが「孤独な心的生活」と呼ばれる意識の自己への現前であり、ここにおいてフッサールがめざす純粋な意識の領野についての分析が可能になる。しかしながら、そのことは表現と指標のあいだの権利上の(juridique) 区別に依存しているのだ<sup>7</sup>。デリダはこうした純粋かつ無媒介な意

味の現前に対して脱構築を仕掛けるが、その際に標的となるのは、フッサールの想定する内的言語(=指標作用を含まない)と言語一般(=指標作用を含む)の区別である。デリダによれば、一般に記号が意味を表象することが可能なのは、それが一回的な使用に先立って、個別具体のコンテクストを超えた意味の際限ない同一性をつねに有しているからであり、その反復可能性が言語の根源的な条件をなす<sup>8</sup>。フッサールにおいては意味のイデア的同一性は内的言語空間、すなわち「孤独な心的生活」においてのみ保証されていたが、デリダは、記号一般が反復可能性を持っている以上、内的言語と言語一般の区別に厳密な基準はありえず、意味に対する指標作用の事実上の絡みつきは還元不可能なものであるとする<sup>9</sup>。

ところで、こうした読解のなかでデリダは、フッサールの現象学的還元を不可能にするものが他者 (autrui) であることを指摘している<sup>10</sup>。通常、ある特定の意味を他者に対して伝達しようとするとき、それら伝達作用は何らかの媒介を経なければならず、この還元不可能な媒介によって、表現は指標作用に結びつけられている。また、カント以来人間の認識を可能にするものとされてきた「触発」という契機も、(それが超越論的な「自己-触発」であるにせよ)何らかの他なるもの (l'autre) との関係を前提としている<sup>11</sup>。ところが、フッサールが現在の知覚を記述するうえで見出した、現在が含みもつ「過去把持-原印象-未来予持」という時間的厚みを取りまとめる根源的時間性・根源的発生点としての「生き生きした現在 (présent vivant)」が、権利上記述可能となる「孤独な心的生活」においては、(デリダが還元不可能とみなす)外的なものである指標的要素が徹底して排除されていた。それゆえ、デリダはこの「生き生きとした現在」を「まったく独自のタイプの自己-触発」<sup>12</sup>とし、もはや自己へのまったき現前と呼ぶことも出来ないこの契機を「自己への直接的な非-現前 (la non-présence immédiate à soi)」<sup>13</sup>と呼べるかもしれないと述べている。

ハイデガーは『カントと形而上学の問題』のなかで自己-触発を「時間が時間を触発する」という時間性の自己起源性として解釈したが、デリダによればこの「時間」という語の導入は、自己-触発自体のもつ他なるものとのたえざる関係としての「運動」を指示すると同時に隠蔽してしまう隠喩の効果——言い換えれば、根源的には「時間」という語をもってさえ本来は名指しえない原印象の運動を存

在論的に語るための事実上の汚染——の不可避的な介入を印づけている<sup>14</sup>。デリダがフッサールの「孤独な心的生活」における意識の直接性および根源的時間化としての「生き生きした現在」を脱構築することによって目指しているのは、この隠喩の作用の両義性を明らかにすることなのである<sup>15</sup>。デリダはこの時間性が構成する現前の閉域に対して絶えず介入する他なるものの運動を「空間化＝間隙化 (espacement)」と呼んだ<sup>16</sup>。

こうしてみれば、『声と現象』という書物は、フッサール現象学の内部で排除される他なるものの位相を暴き出そうとする試みとしては、レヴィナスの『全体性と無限』と一定の動機を共有しているようにも見える。しかし「暴力と形而上学」においてデリダは、『声と現象』でフッサールに対して仕掛けた脱構築と、表面上はちょうど対をなすような批判をレヴィナスに向けている。すなわち、フッサール現象学に対して仕掛けられた脱構築がそのまっつき現前性を標的としていたのに対し、レヴィナスに対する脱構築は、まっつき非-現前としての他者を標的にしているのである。ただし、この対称性は表面的なものに過ぎないだろう。ここから、具体的に「暴力と形而上学」のテキストを読解していくことで、二つの批判のあいだにある位相差を明らかにしたい。

### 3. 「暴力と形而上学」におけるレヴィナス批判

先にわれわれは「空間化＝間隙化」という語に言及したが、この語自体は「暴力と形而上学」のなかでは一度も用いられていない<sup>17</sup>。その理由はもっと後で触れるが、それでもこの論文において、デリダが「空間」という語を重視しているということは間違いない。まずはこの「空間」の概念に沿って、「暴力と形而上学」におけるレヴィナス批判の輪郭を素描していく。

レヴィナスの『全体性と無限』までの歩みは、概略的には、「フッサール現象学の受容と批判→批判対象のハイデガーへの拡大→全体性批判」という経緯にまとめられる。レヴィナスは、初期フッサール研究『フッサール現象学における直観の理論』(1930)において、すでにフッサールに対する批判的視座を提出している<sup>18</sup>。この時期においては維持されていたフッサールに対するハイデガーの優位は、論文「存在論は根源的か？」<sup>19</sup> (1951)ではもはや重視されなくなり、

存在論的理解に回収されることのない他者との関係が語られるようになる。デリダはここで「ハイデガー的配慮は[……]光を特徴付ける「内部-外部構造」によってすでに規定されている」<sup>20</sup> というレヴィナスの記述に注目する。第一に、デリダによれば、レヴィナスはハイデガーにおける「内部-外部構造」そのものを批判するのではなく、そうした分節化に先立ちこの構造に揺さぶりをかける状況、すなわち他者との関係性を隠蔽するような挙措にこそ批判を向けている。また、すくなくとも『時間と他者』(1946) や『実存から実存者へ』(1947) の時期にレヴィナスは、みずからの思想を語るうえでは「外部性」という概念を追い払っていた、とデリダは言う<sup>21</sup>。レヴィナスにとって、「内部-外部構造」はその批判の主たる対象にはならずとも、基本的には「根底的他性を中性化する」ものであり、それゆえその構造を前提とする「外部性」という観念は避けられるべきものであるはずだ。

しかし、『全体性と無限』においてレヴィナスのとる戦略は、よりいっそう困難なものである。というのも、そこでレヴィナスはたんに空間的概念としての外部性を斥けるのではなく、「真の外部性が空間的なものではなく、空間的なならざる無限の、絶対的な外部性——〈他〉の外部性——があること」を示そうと試みるからである<sup>22</sup>。デリダがレヴィナスの他者理論に脱構築を仕掛けるのはこの地点においてであるが、この点に関するデリダの批判についてはすでに多くの研究がなされているため<sup>23</sup>、ここでは要点を抑えておくに留める。すなわち、なぜ非-空間的な関係を示すのに「内」との連関にある「外在性」という語を用いねばならないのか？ またそれはなぜ「関係」であり得るのか？ そして外在性という語を消去するのでもなく、「真の外在性は空間的ではない、つまり外在性ではないなどと言って、この概念に消印を押さなければならないのか」<sup>24</sup>。デリダいわく、こうした「内-外」の構造は理論上避けられないものであり、哲学的なロゴスは必ず空間的なものの隠喩を必要とする<sup>25</sup>。非-空間的なものを論じようとしたとき、それは空間的なものの文字通りの否定によってしか記述できない。

真の外在性は非-外在性であって、内在性ではないと言うことが出来る。

抹消線によって書くことが出来るし、抹消線の抹消線によって書くことも

出来る。〔しかし〕抹消線が何かを記すとすれば、それは依然として空間の中で描くことなのだ<sup>26</sup>。

ここでデリダは言語の空間性とその不可避性を語っている。このことは、デリダのレヴィナス批判としてよく知られる、「事実上／権利上の区別の混同」という問題とも接続している。デリダによれば、レヴィナスは、「他者」を表象の内に還元し、自己と同型性を持った他我として語るフッサールを批判するが、この他者への言及は、事実上の他者の最低限の主題化(つまり言語を介した概念化)としての「志向的変様」を認めた上での、権利上のものである。レヴィナスもまた、事実の上では、不可能な他者を語っており<sup>27</sup>、そのうえでなされるフッサールへの批判は、このレヴィナス自身も侵さざるを得ない事実上の主題化の先行と超越論的な権利上の言及との区別を混同しているのである。

たしかにデリダがここで展開しているのは、フッサールに対して仕掛けた、現前の形而上学批判とちょうど対になるような脱構築であるが、その差異もまた明らかだろう。すなわち、『声と現象』においてなされた脱構築が、もっぱら言語の内部で行なわれたのに対し、「暴力と形而上学」で行なわれている脱構築では、「内部-外部構造」をもたらす言語空間そのものの内部と外部の境界が問題とされている。そしてデリダによれば、「概念の暴力を規定することのない、言い換えればそれを經由することのない文など存在しない」<sup>28</sup>。だからこそ、デリダはレヴィナスのまったき他者を「純然たる不在ではない……それはある(*certain*)不在なのである」<sup>29</sup>と述べるのである。この言語の内部での「内部-外部構造」と言語構造そのものの「内／外」とのあいだの位相の差異が、デリダが「暴力と形而上学」において「空間化＝間隙化」という語を用いることがないひとつの理由になっているだろう。そしてこの差異がデリダのレヴィナス論を読むうえで鍵となる。

#### 4. 「暴力と形而上学」の分岐点

ここで重要なのは、デリダが「概念の暴力を經由することのない文など存在しない」ということについて、それをレヴィナスもまた否定しないだろう、と述べ

ている点である。これは一見、矛盾したことではないだろうか。というのも、デリダは一方でレヴィナスが「外部性」や「無限」といった概念の(言語による)汚染可能性を神学的文脈によって斥けていると批判しつつ、他方では、そのまったく他者の汚染可能性をレヴィナス自身が認めている、と述べていることになるからだ。しかしデリダにとってそこに矛盾はない。第一に、デリダの枠組みに沿いつつ整理するならば、レヴィナスは真の外部性を認め、(それゆえに)空間的な「内部-外部構造」を二次的なものとみなす(それは他者に対して適用されるとき暴力となる)。同様に、デリダによれば、レヴィナスは事実上、無限に他なるものについて語るが、その語りの中に、エゴによる対象の変様を認めることを(それが全体的で暴力的な行為であるという理由から)拒む<sup>30</sup>。このことをパラレルに読むならば、次のように言うことができる。すなわち、レヴィナスは他者の変容を伴わない真の語りを認めているのであり、それゆえに事実上の言語の介在を認めてもなお、真の語りを汚染から守っておくことができるのである。そして、この枠組みに従うならば、デリダの批判は正当である。なぜなら、そのときデリダはレヴィナスにおける真の語り、すなわち口頭の言を音声中心主義として脱構築すれば済むことになるからだ<sup>31</sup>。レヴィナスが概念の暴力を認めていたとしてもそれはデリダにとって二次的な問題であり、問題は依然としてそこから切り離されたまったく他者の次元が純粋なかたちで保存されているという点にのみ存する。そこでレヴィナスの思想はまさしく「その源泉において純粋に異他理論的な思考の夢 (le rêve d'une pensée purement hétérologique)」<sup>32</sup>に留まるだろう。しかし、事態はそれほど単純なのだろうか。レヴィナスはより深く、デリダが指摘するレベルでの存在論による他者の汚染を受け入れているのではないか？ 言い換えれば、レヴィナスが「言語の外に思考はない」と述べる時、真の語りもまた概念の暴力から無傷ではあり得ないと考えられているのではないか。このこと这个消息を明らかにするには、レヴィナスのいう他者の次元が、決して直線的にまったく外部性へと向かっているわけではない、という点を確認する必要がある。

## 5. レヴィナスにおける他者の位相、多産性の問題

冒頭で触れたように、通常、レヴィナスの思想は「他者」ということばに象徴的に理解され、それ故にまったき他者との純粋な(非-)関係性を批判したデリダの読解は決定的なものとしてきた。しかし、レヴィナス自身は『全体性と無限』第4部Cのなかで、「他者は終着点ではない」<sup>33</sup>とし、さらなる超越としての次元を呈示しようと試みている。そこで問題となるのが「多産性 (fécondité)」という概念である。なぜそのような次元が要請されるのだろうか。この産出のモデル自体は、そのプレテクストを、『全体性と無限』から13年先立つ論文「現実とその影」(1948)に見出すことができる。それは「作品 (œuvre)」と解釈の関係である。「現実とその影」において、「作品」は第一義的には、対象をイメージへと置き換え、固着させる危険なものとして批判されるが、それは「解釈」によって再び現実へと結び直されることで、運動を取り戻すものとされる<sup>34</sup>。では、なぜこの作品と解釈のモデルから、多産性のモデルへの移行が必要なのか。多くの論者が指摘する通り、このような作品に対する肯定的な態度は『全体性と無限』においては殆ど全面的な作品批判へと一転する<sup>35</sup>。たしかに『全体性と無限』においても、主体の意志は作品を介して他者に曝され、その限りにおいてわれわれは他者と関わるができることとされる<sup>36</sup>。しかし、ここでレヴィナスはそのような他者との関係性はいまだ暴力的なものに留まると考えており、それゆえ「作品によってだけでは、〈私〉は外部に到達することがない」<sup>37</sup>と述べる。作品にあっては、「その内容をコンテクストから切り離すことは出来ず、作品そのものがそこに統合されている体系から切り離すこともできない」<sup>38</sup>のであり、それ故「作品のうちに誰かの意図が見抜かれたとしても、それはいわば欠席裁判で判決が下されたに過ぎない」<sup>39</sup>。ここでレヴィナスはこうした作品による意志の疎外を、文字で書かれた語、エクリチュールの『パイドロス』における劣位を重ねており、そこに音声中心主義を見て取ることは容易いが、作品概念をめぐる両義性を今一度確認しておかねばならない。先取りして言えば、『全体性と無限』におけるレヴィナスは、通常言われるような全面的な仕方でも作品概念を批判しているのではない。ここでわれわれは、むしろ、レヴィナスが作品の不可避性を認めつつ、意志の疎外という否定的な側面を乗り越えるために「多産性」という概念を練り上げていった、という見通しを持っている。

第一にレヴィナス曰く、「意志は作品を通じて〈他者〉に曝されて」<sup>40</sup>おり、こ

これは主体の身体性の次元に相当する。また「どのような意志であってもその作品から切り離されて」<sup>41</sup> あり、他者の手にゆだねられている。『全体性と無限』がこのような作品によって意志が疎外された歴史空間を批判する書であることは間違いない。しかし、意志がこうした他者の暴力から自由であり完全に自存的であることは、自発的な「死」——ハイデガー的な死への先駆的覚悟性——によってさえ不可能である、とレヴィナスは言う。他者が殺害することではなく、「当人の死そのもの」を望む場合、自発的な死は「はからずも疎遠な意志を満足させてしまうことになる」<sup>42</sup> からだ。このことは他者の「疎遠な意志」もまた一つの作品として供されており、それを完全に理解することが不可能であるという事態をも示しているだろう。「疎遠な意志に対して断固として対立することは、おそらくはむしろ狂気である」<sup>43</sup> とレヴィナスが述べるのは、作品としての有限性を超えて他者の意志と同一化することの不可能性が前提とされているからである。無限に隔たる他者との距離を縮減する中立的な言語の働きをレヴィナスが「裏切り (trahison)」<sup>44</sup> と表現していたことを思い出さねばならない。「意志はそれが死すべきものであることで、裏切りと忠実さという二重性を含んでいるが、その二重性は意志の身体性において生起し、また行使される」のであり、「死すべき意志における死の繰り延べ——すなわち時間——とは、現実存在の様式であり、〈他者〉との関係に入り込み、分離された存在の現実性 (réalité) である」<sup>45</sup>。その意味では、主体は作品として、存在論的裏切りのうちでしか、他者と関係することが出来ないのだとも言える。しかし当然ながら、このような次元にのみ留まることはレヴィナス自身が目指すところではない。

では、多産性のある愛とエロスの次元における他者との関係はどのような構造を持っているのか。レヴィナスによれば、愛は他者へと向かう超越であるが、他方でそれは「欲求 (besoin)」<sup>46</sup> に自足してしまう傾向を持つ<sup>47</sup>。愛とエロスの次元における範例的他者としての「女性的なもの」は、可傷性とあいまいさを特徴とし、作品のように暴力にさらされつつも、その本質には到達することのできない渴望の対象であり続ける。この冒しがたさは、エロスの関係とは一見次元を異にするが、殺人の不可能性を告げる「顔」との関係性を前提とする<sup>48</sup>。同様に、女性的なものとの関係は一方では「社会的な関係のまさに対極にあるもの」であり、そこでは「第三者が排除される」<sup>49</sup>、つまり双数的な全体性を

形成するものでもあるが、他方でそれは暴力の次元に留まることのない外部性を可能にする。それゆえエロスの対象としての女性的なものとは、暴力の対象である作品と侵すことの出来ない顔とのあいだに位置するものであり、それは作品と解釈のモデルにおいてそうであったように、解釈するものとされるものの一方向的な関係性ではない<sup>50</sup>。

そして、愛するものと愛されるものはここでこそ「全ての可能な企図を超え」、「了解されうる一切の権能の彼方で子を産む」<sup>51</sup>。これが「多産性」の次元である。渴望それ自体が成就されることとは、他者との双数的な関係を超えて新たな渴望が産出されることである。女性的なものとは、たとえば言えば「顔を認められた作品」なのであり、多産性とは、作品が解釈に委ねられ、そこで生じた解釈がさらにみづから作品となり、再び解釈に曝される……という運動を介してあらたな解釈を産出していく、そのような未来の時間である。ここではもはや、女性的なものが真の他者であり、作品はその不完全な表出、あるいは事実上の汚染であるなどと言うことは出来ない。女性的なものは事実においても権利においても、それ自身が作品でもあるのであり、だからこそレヴィナスは「多産性は存在論的カテゴリーとして設定されねばならない」<sup>52</sup>と述べる。レヴィナスは他者との存在論的関係の内部から、それを超出するものが出来る契機を描こうとしているのである。

## 6. デリダによるレヴィナス批判とエロスのモチーフ

ここまでの議論をまとめておく。「多産性」とは、ひとことで言えば存在論的カテゴリーである他者との双数的な関係を介して、まったき外部性を産出する、その場である。レヴィナスは、存在論的なカテゴリー、あるいは言語の介入が不可避的なものであることを認めつつ、まさしくその次元を介することによってこそ、真の外部性を思考しようと試みている。それゆえ、まったき他者の根源的汚染という事実をもつてのみなされるデリダのレヴィナス批判は正確にはすれ違っている。しかしそれでもなお、デリダの批判は有効な射程を有していると言いうる。なぜならそれは、レヴィナスにおける存在論的体制と、多産性を通じて成就される真の外部性とのあいだの差異という前提それ自体を標的と

するものだからである。レヴィナスがいかに存在論的次元を考慮に入れようとも、そのこと自体は変わらない。しかし、レヴィナス自身の理路を追うことで明らかになったのは、彼にとって存在論的次元はたんにまったき外部性から切り離された二次的な次元の問題なのではなく、反対に、その次元を介することでしか外部性へと至ることの出来ないような、冒さざるをえない危険であると同時に不可欠な通路でもあるということであった。

以上のことを鑑みるのであれば、デリダによる批判は、それが空間的な「内部-外部構造」の介在による真の外部性の引き裂きないし汚染という問題に向けられているのであれば、存在論的カテゴリーによって脅かされることがある意味で前提とされている他者の次元ではなく、この「内部-外部構造」の内と外のあいだの緊張関係がもっとも先鋭化する地点としてのエロスの関係、多産性をこそ、その分析の主たる対象とするべきではなかったか。デリダ自身、「暴力と形而上学」の末尾に付された註において、女性的なものが存在論的カテゴリーであるということを通りがかりに指摘している<sup>53</sup>。また、第二のレヴィナス論「この瞬間のこの作品においてわれここに」(1980)やジャン＝リュック・ナンシー論『触覚』(2000)の一部分では、デリダは、『全体性と無限』での性的差異の問題や愛撫における接触の法といったエロスのモチーフを分析の中心に置いている。そこではレヴィナスのエロスの関係が約束を不可能にすること<sup>54</sup>、そしてレヴィナスにおける性的差異の位置づけなどが問題化されている<sup>55</sup>。こうした文脈へのアプローチは、レヴィナスの他者論における否定神学性、すなわち超越の極を目的とする「～ではなく～でもなく……」といった否定の連辞およびそのねじれた否定性に対するデリダの距離感をよりよく理解させてくれるだろう。さらに、『全体性と無限』におけるひとつの到達点であると言ってもよいエロスの現象学および多産性の議論は、実のところレヴィナス後期の主著『存在するのは別の仕方では』では、少なくとも表面的には完全に放棄されることになる。こうした事態の消息はおそらくレヴィナスの思想的変遷の根幹に関わる。ここでこれらの論点について具体的に論じることはできないが、デリダとレヴィナス間においてエロスのモチーフがもつ重要性を指摘することをもって、本稿は閉じることにしたい。

註

1. Jacques Derrida, *L'écriture et la différence*, seuil, 1967 (合田正人訳『エクリチュールと差異』法政大学出版, 2013年)以下, デリダとレヴィナスの著作からの引用は, 既訳を参照しつつ, 文脈に応じて適宜訳を変更している. その際, 原書のページ数の横に訳書の当該箇所を併記することにする. また, 引用内原文イタリック強調は下線で表わし, []内は引用者による補足とする. その他, 特に断りがない場合, 引用外での強調は圏点で表わす.
2. Emmanuel Lévinas, *Totalité et infini: essai sur l'extériorité*, (1961), Kluwer Academic, édition 13, 2010. (熊野純彦訳『全体性と無限 上・下』岩波書店, 2005 - 2006年)
3. *L'écriture et la différence*, *op. cit.*, pp. 140-141 / 一八五頁
4. *ibid.*, p. 161 / 二一三頁
5. *ibid.*, p. 152 / 二〇一頁
6. Jacques Derrida, *La voix et le phénomène*, PUF, 1967, pp. 22-23 / 四七一四八頁 (林好雄訳, 筑摩書房, 2006年). フッサールは言語の持つ「指標 (Anzeichen)」と「(表現 Ausdruck)」という二つの側面を区別している. この区分を可能にするのが意味 (Bedeutung) という審級であり, 指標が無意味であるのに対し, 表現は有意味である. 指標的な要素とは, たとえば身振り手振りといったように, つねに外的な空間を含みもつ要素のことであり, フッサールにおいてそれらは, 事実上は表現に絡みついているとしても, 権利上は意味とは異なる(無-意味な)要素として, 斥けられねばならない.
7. *ibid.*, p. 21 / 四五頁. デリダは『声と現象』ではこの権利上の純粋な現前性に対して, 事実上の指標作用の絡み付きが還元不可能であることを明らかにするが, 後述するように「暴力と形而上学」においてはフッサールのこの還元の試みにおける「権利上/事実上」の区別を強調したうえで, レヴィナスが両者を混同してフッサールを批判していることを指摘している.
8. *ibid.*, p. 55-56 / 一一三一一四頁
9. *ibid.*, p. 63 / 一二六頁
10. *ibid.*, p. 39 / 八一頁. ただしここでのデリダの言及は, フッサールの枠組みのなかで他者とのコミュニケーションが排除されていることの動機を推測するかたちでなされている. デリダにとって外的なもの, 他なるものの介在は, たんに個別具体的な他者との関係においてのみならず, 言語一般に普遍的な構造である.
11. *Ibid.*, p. 95 / 一八五頁. また, ここでの「触発 (afféction)」に関する整理は『岩波 哲学・思想辞典』(岩波書店, 1998年)「触発」の項を参照している.
12. *Ibid.*, p. 88 / 一七四頁
13. *La voix et le phénomène*, *op. cit.*, p. 40 / 八二頁
14. *ibid.*, p. 95 / 一八六頁

- <sup>15</sup> *ibid.* pp. 95-96/一八七—一八八頁. また, p. 94 およびそこに付された脚註1〔邦訳一八五頁・原註41〕も参照。「フッサールはわれわれを絶えずこうした隠喩に対して警戒させている (Husserl nous met sans cesse en garde contre ces métaphores). デリダによれば, フッサールは時間化の根源的な源点を名指しえぬものとするが, それは意識に現前するもろもろの存在者でもなければ, 意識の絶対的主観性そのものでもない. それらはすべて名指すことができるのであり, 名指しの構成を経てわれわれの意識に現前する. 「フッサールによれば, 名指しえぬものは, ただ主観の「絶対的特性」のみである (Ce qui est innommable, selon Husserl, ce sont seulement les « propriétés absolues » de ce sujet)». しかしこの点を強調しつつも, デリダによれば, この絶対的主観性それ自体が外在的なもの, すなわち他なるものとの「主観-客観の対立」においてしか「絶対的」たりえないのであるから, 実際のところ構図は反転する. すなわちこの絶対的主観性から出発して根源的時間性が見出されるのではなく, 根源的時間性という名指しえぬ「流れ」のなかから主観性が構成されるのである. 「主観性の概念は, アプリオリにかつ一般的に, 構成されたものの秩序に属しているのである (Le concept de *subjectivité* appartient *a priori* et en général à l'ordre du constitué)」.
- <sup>16</sup> *ibid.* /同頁
- <sup>17</sup> 「暴力と形而上学」が収められた著書『エクリチュールと差異』の冒頭には「読解の空間化＝間隙化 (espacement) 以外には新しきものなき全体」という一節が掲げられている. このことは, デリダが『声と現象』と「暴力と形而上学」という二つの文章のなかで, 同じひとつの問題を表裏両面から論じていることを示唆するだろう. すなわち, 前者においてはひとつの全体が形成する閉域に対する他なるものの介在が, 後者においては, 全体性につねにすでに取り憑く他者といえども, 全体性に対して完全に外的ではありえないということが指摘されているのである.
- <sup>18</sup> *La théorie de l'intention dans la phénoménologie de Husserl*, (1930), J. Vrin, 1994 (佐藤真理人ほか訳『フッサール現象学の直観理論』法政大学出版, 1991年)レヴィナスによれば, フッサールが対象を論じることが出来るのは, 対象を「理論的に認識する」(p. 192/一八六頁)限りにおいてであり, このことは, 現象学的還元において出会われる他者が「具体的生のうちにあるような対象ではなく, ひとつの抽象物」(pp. 214-215/二〇八頁)として出会われることを意味する. 意識に現れ, 理論的に認識された対象のみを扱う「現象学的還元」は理論の優位を前提としており, そのこと動機について問われることがない.
- <sup>19</sup> 「そもそも存在者との関係は, まずもって存在者を存在者として了解し, 存在者を自由に存在者としてあらしめること以外のものであり得るだろうか. あり得ない. しかし, 他者に関してはその限りではない.」Emmanuel Lévinas, *L'ontologie est-elle fondamentale?*, in *Entre nous. Essais sur le penser-à-l'autre*, Grasset & Fasquelle, 1991. p. 18/一一頁(合田正人ほか訳『われわれのあいだで』法政大学出版, 1993年)
- <sup>20</sup> *L'écriture et la différence*, *op. cit.*, p. 132/一七三—一七四頁
- <sup>21</sup> *ibid.*, p. 165/ 二一八頁

- <sup>22</sup> *ibid.*, p. 165/二一九頁. たとえば, レヴィナスは『全体性と無限』第3部Aにおいてつぎのように述べている. 「空間における間隙とは, そこから絶対的に外部的な存在が立ち現れるような絶対的な間隔ではない.」(*Totalité et infini, op. cit.*, p. 208/下, 二三頁)
- <sup>23</sup> たとえば関根小織『レヴィナスと現れないものの現象学: フッサール・ハイデガー・デリダとともに反して』晃洋書房, 2007年など. ここで関根はこれらの問題を総じてレヴィナスにおける「超越論の欠如」としてまとめている.
- <sup>24</sup> *L'écriture et la différence, op. cit.*, p. 165/二一九頁
- <sup>25</sup> このことはもちろん, デリダがレヴィナスに対して指摘する反ヘーゲル主義の失敗の構造的な原因である. レヴィナスは『全体性と無限』のなかでヘーゲルの「真無限」と「悪無限」の区別に言及しつつ, フッサールのコギトを, たんに有限なものの反対物としての「悪無限」であるとし, (同時にヘーゲルの真無限の規定=有限なものがそれ自体で完結していることに反しながら) 真の無限が否定性と関わらないことを主張している(*Totalité et infini, op. cit.*, p. 214/下, 三四頁). しかし, デリダによれば, 哲学的言語のうちで無限を語る時, あるいは反対に有限を語る時にはつねにもう一方の極が前提とされているのであり, 否定性と無関係な無限はあり得ない. 還元不可能な有限から出発するフッサールに対するレヴィナス批判は, レヴィナスの思惑とは反対に, ヘーゲルの無限についての規定を反復してしまっている. またここで言う無限と有限の関係は他と同様の関係についても同様であるとデリダは述べている. (*L'écriture et la différence, op. cit.*, pp. 175-176/二三二-二三四)
- <sup>26</sup> *ibid.*, p. 166/二二〇頁
- <sup>27</sup> *ibid.*, p. 183/二四三頁
- <sup>28</sup> *ibid.*, p. 219/二九四頁
- <sup>29</sup> *ibid.*, p. 135/一七八頁
- <sup>30</sup> 「レヴィナスは事実上, 無限に他なるものについて語るが, しかし彼はそこにエゴによる思考的寛容を認めること——それは彼にとって全体的かつ暴力的な行為だろう——を拒否しつつ, 彼固有の言語の基礎づけそのものと可能性とをみずから奪っているのだ.」(*Ibid.*, p. 183/二四三頁)
- <sup>31</sup> この点についてはほかの読解可能性もまた同様に可能である. たとえばデリダはここでレヴィナスが他者との関係性を「歴史性」から切り離すことでその純粋性を保っていると指摘している(*Ibid.*/同頁). この指摘に従うならば, デリダのレヴィナス批判において重要なのは, 歴史の外部という問題だということになる. レヴィナスが記述する他者との関係性において歴史的なものが完全に排除されているか, という問いもまた別途検討されるべきだろう. ただし本稿では, デリダが「暴力と形而上学」においてもっとも力点を置く言語の問題のみに焦点を絞って論じる.
- <sup>32</sup> *L'écriture et la différence, op. cit.*, p. 224/三〇一頁
- <sup>33</sup> *Totalité et infini, op. cit.*, p. 302/下, 一九七-一九八頁
- <sup>34</sup> Emmanuel Lévinas, *Les imprévus de l'histoire*, Fata Morgana, 1994 (合田正人編訳『歴史の不測』法政大学出版, 1997年) pp. 146-147/一三〇頁. 多くの論者によれば, この作品

と解釈への肯定的な態度は『全体性と無限』では一度は完全に取下げられたとされる。たとえば、村上靖彦は、作品の解釈可能性は『全体性と無限』では「一度は全面的に否定」されるが、1980年代のタルムード読解において再検討されると指摘している。（『レヴィナス—壊れものとしての人間』河出書房新社、2012年、pp. 189-190）

35. レヴィナスの作品 *œuvre* 概念を分析した論文に Yotestu Tonaki, « Question de l'“œuvre” chez Emmanuel Lévinas », 『フランス哲学・思想研究』一三号, 日仏哲学界, 2008年所収. および芸術作品についてのレヴィナスの記述を「顔」の概念とともに跡付ける論文に郷原佳以「顔」と芸術作品の非-起源」『現代思想』四〇-三号, 岩波書店, 2012年所収)などがある. いずれも『全体性と無限』の時点ではレヴィナスが作品概念に対して批判的であったことを確認している.
36. *Totalité et infini, op. cit.*, pp. 252, 257-258/下, 一〇八, 一一九頁
37. *Ibid.*, p. 91/三六一頁(強調引用者. このことは裏もまた真なのであり, 作品としての契機がなければ, 外部に至ることもまたないと言えるだろう.)
38. *Totalité et infini, op. cit.*, p. 192/上, 三六四頁
39. *ibid.*, p. 198/上, 三七四頁
40. *ibid.*, p. 250/下, 一〇五頁
41. *ibid.* /下, 一〇六頁
42. *ibid.*, p. 255/下, 一一四頁
43. *ibid.* /下, 一一五頁
44. *ibid.*, p. 34/下, 六四頁
45. *ibid.*, pp. 257-258/下, 一一九頁
46. 「渴望 *désir*」と「欲求 *besoin*」の区別については第1部Bおよび第2部Aなどを参照. 前者が他者へと向かう無限の希求であるのに対し, 後者は主体における欠如にもとづく欲望であり, 享受によって満たされるものである. (*Ibid.*, p. 56, 121/上, 一〇七-一〇八, 二二七頁)
47. 「愛は欲求へと向きを変えつつも, 他者との関係であり続ける.」(*Ibid.*, p. 285/一六六頁)
48. *ibid.*, p. 294/下, 一八三頁
49. *ibid.*, p. 297/下, 一八八頁
50. 「官能が目指すものはしたがって, 他者の官能である. 官能とは他者の官能であり, 他者の愛を愛することである」(*Ibid.*, p. 298/下, 一九〇頁)ここで女性的なものとの関係が依然として想像的な, それゆえ一方向的なものであると批判することも可能だろう. ただし, レヴィナスにおいてこの関係は, それが双数的関係であるがゆえに, 愛するものが愛されるものを解釈するとき, 愛されるものもまた愛するものを解釈しているという一種の入れ子構造にある. そこにおいて循環のない関係性は破綻をきたしているものであり, そこから多産性も生じる.
51. *ibid.*, p. 298/下, 一九一頁
52. *ibid.*, p. 310/下, 二一三頁

- <sup>53.</sup> *L'écriture et la différence*, op. cit., p. 228 / 三〇七頁. この点については「この瞬間のこの作品においてわれここに」でふたたび取り上げられることになる.
- <sup>54.</sup> Jacques Derrida, *Le toucher*, Jean-Luc Nancy, Galilée, 2000, p. 108 / 一七四頁 (松葉祥一ほか訳『触覚, ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』青土社, 2006年). デリダは本書でレヴィナスのエロスの関係を「接触の法」という観点から取り上げる. デリダによれば, 法一般は「触れながら, 触れることが禁止される」, あるいは「触れずに触れうる」といった不可能事から開始される. そこでは約束することとそれを破棄すること(破約)が同時に行なわれねばならない. レヴィナスにおける女性的なものとの関係においては「汝殺すなかれ」という法が顔によって告知らされているが, 本稿でも見てきたように, エロスの次元はその顔に対する不可能な侵犯を介することで多産性へと成就される. このとき両者の立場はほとんど変わらないようにも見えるが, デリダによれば, このようなレヴィナスの立場は, 「汝殺すなかれ」という法の破棄(破約)をすでに受け入れてしまっている. やや敷衍してみれば, デリダによるレヴィナスのエロス論批判は, 不可能な接触という原初的光景において, 多産性という成就がすでに前提にされているというその目的論性にむけられていると考えられる. このようなレヴィナスのいわば「性急さ」をデリダは「絶対的早熟さ l'absolue précocité」と呼んでいる.
- <sup>55.</sup> Jaques Derrida, « En ce moment même dans cet ouvrage me voici », in *Psyché. Invention de l'autre*, Galilée, 1997, p. 197. ここでデリダは, レヴィナスのまっつき他なるものの脱性別化, およびそのまっつき他なるものとの関係による性的差異の二次化という点を問題化している. ただし, 他なるものの位相が脱性的なものとして現れ, エロスの関係が後景へと退くのは, 『存在するとは別の仕方である』においてであり, デリダの分析も同書を読解の中心にしている. なぜ『全体性と無限』において一度は決定的に提出されたエロスの関係が遠景へと退くのか? この点は別途検討されねばならない.